

### 三 アナキズムとの出会い

#### 大杉との密会

エスペラントの活動に専念していた山鹿に、アナキズムを覚えてくれたのは若い一人の印刷工であった。

——築地活版欧文部のフレイム(植字色)は、一人に一台ずつ配置されていたが、私のとなりは空席だった。そこへ新しく熟練工が入社してきた。原田新太郎と名乗り、二〇歳をすこし出た位のおとなしそうな青年である。ある日彼は、私の赤い救世軍帽子をみて「キリスト教では、天皇や政府をどう考えるのか？」と聞いた。私は待ってましたとばかり、「聖書に、汝ら王の権威に従うべし、それはすべての権威は神より出しものなれば、とある」とやった。これは毎晩やっている救世軍の伝道で、考えこんでいる人に近づき信仰に入るようにすすめる方法であった。

原田は「神は人間を創ったというのに、その人間がなぜ喰ってゆけないのか、神は公平だというのに、なぜ金持ちと貧乏人、病人と健康者の不平等があるのか」など次々に私に答えられぬ問

題を出してきた。そして「もともとキリストは歴史上非実在の人物で、作り話にすぎない」という。くやしいが私には太刀うちできなかった。

彼はそれと明らかに語らなかつたが、その年の一月二四日死刑に処せられた幸徳秋水、菅野すが、内山愚堂らと親交のあったことがうすうすわかってきた。そしてこれは国禁の書だと極秘で貸してくれたのが、幸徳訳平民社刊の『パンの略取』であった。私は、それをむさぼるように読んだ。みるみる世の中をみる目が変わっていくのがわかった。

原田がしきりにすすめるので、ある日エス文で大杉にハガキを出した。するとすぐ「次の日曜三越の待合室で待つ」とエス文で返事があった。そのころ三越の待合室は、お客に一々お茶を出し、大皿にはビスケットが食べ放題とばかり盛ってあった。指定の日曜日、原田と待っていると大杉は縞のセピロ服に大きなパイプをくわえ、特徴のある目玉をギョロつかせていきなりヤアと声をかけてきた。尾行は途中でまいてつれてきていなかった。三越のような、かえって人目のあるところの待合室などを逆手に利用するのが尾行をまくコツらしい。

私がエスペラントで印刷工だという大げさによることで、「西洋でも印刷工が革命の先頭に立っている。エスペラントは世界の労働者が団結するための最も有力な武器だ」と大いに励ました。ビスケットを食べお茶を飲んで話したが、大杉の尾行はいつまでたってもあらわれないう。尾行は、まかれるとその日の日当があたらない。あとあともうるさいし可哀相だと、心あたりをさがしながら、日比谷公園まで歩いて、またベンチにすわり込み、暗くなるまで話して別れた。

この半日の大杉との対話は、私の将来を決定するものとなった。私はその夜、寢床の中で一晚中、自分がこれから進もうとしている道のことを考え、昂奮して転々とした。

### キリストとの訣れ

——翌日、私は深く決心して救世軍の集まりへ出かけていった。女の兵士たちが「神よ、この悪魔に憑かれた兄弟をお助け下さい」と声をあげて泣く前で「今日から私はキリストと訣別する。そしてあの二人の無政府主義者たちの後を追って働こうと覚悟を決めた……」と宣言した。こうしてようやく、私は救世軍——キリストに別れを告げたのであった。

大杉に出合った翌月、原田につれられて石川三四郎にあった。たまたまそこに四角いヒゲづらの男がいて、それが渡辺政太郎だった。石川は、白顔の弱々しくもみえる体躯で仲々の色男だった。有名な旧自由党の女壮士に待合へくわえこまれた、という艶聞もさこそと思われた。彼はいま横浜で日曜学校を開き、クリスチャンの間に社会主義宣伝をやっていると話した。私が「神をすてきれなくて苦しんでいる。しかしアナキストの中に神を信じる人は一人もないと聞いて、悩んでいる」と言うと、よこから渡辺が、石川君、君の神観を話したらどうかと言う。その時石川が話したことはほとんど忘れたが、私はようやく神が宇宙天地の支配者で最高の権威だという迷信から目覚める糸口をつかんだのであった。

山鹿のキリスト信仰の経験は、彼の生涯にみられる一種のストイックさとそのモラリズムとして残ったが、大むねとしては彼をしてむしろ明快な唯物論者、合理主義者へと、一層おしすすめたと言う

べきであろう。

このようにして、エスペランチスト山鹿のアナキズム運動への接近は始まっていった。それは一九一一年（明治四四年）大逆事件直後の、主義者たちいきびしい監視と弾圧の眼が張りめぐらされたあの暗黒時代であったことは銘記されるべきである。そのような時、運動にはいるということが、どのようなことを意味するものか、もちろん山鹿にとってはなみなならぬ決意であったにちがいない。そして、そのような決意のもとに、日本のアナキズム運動史上にも、彼自身の生涯にとっても、もっとも特筆すべき中国アナキズム運動との交流——上海へ渡って師復らの仕事を助ける彼の活動が、やがて始まるのである。

### 印刷工・原田新太郎

一九一一年といえば、いうまでもなく大逆事件の名のもとに、その一月二四日、幸徳秋水ら一一名と二五日の管野すがをあわせて一二名の死刑執行があり、さらに一二名の無期と、数百名の連累者が天皇制テロルのいけにえとして、獄舎につながれていた年である。そのすさまじい弾圧と威迫は、なお残党狩りの意味をもふくめて、検挙をまぬがれた主義者たちの上に荒れ狂い、著名な運動家が活動を放棄したり、蟄居を余儀なくされたときであった。

このような——のちに「冬の時代」と呼ばれ、生残った人達のほとんどが鳴りをひそめ姿をかくした時、たまたま山鹿が印刷工原田新太郎によってアナキズムを知り、さらに大杉栄に会ったということは、まことに稀有にちかいかい偶然かもしれない。しかしまた、一見表面から運動がまったく消えたか

のごとくいわれる冬の時代に、なお山鹿を手引きした原田新太郎のような存在とその活動があったことは注目すべき事実である。と共に、冬の時代にも運動が決して停止したのではなく、なお地下水のように力強くひそかな浸透をやめなかったことを、物語るものでもある。

印刷工原田新太郎については、大正六年頃夭折したらしく、ほとんど何の記録も残ってはいない。わずかに知りうることは、一九〇九年五月、内山愚堂(大逆事件で死刑が天皇制批判を内容とした『入獄記念無政府共産』というパンフレットの秘密出版によって横浜で捕えられ、その追及捜査から、「道徳否認論」さらに「真に人類を益する者は何乎」というチラシの無届出版が発覚し、その発行者として原田新太郎、谷田徳三が捕えられ、二四日、原田は罰金二円の判決を受けた記録がある。

また当時、幸徳秋水、菅野すがが厳しい監視の眼をおかして発行した『自由思想』に、「現に日々如何なる時分も尾行巡査に伴われ居れるは、竹内善朔、戸恒保三、高橋勝作、川田倉吉、谷田徳三、原田新太郎、渡辺政太郎の諸氏および本社の幸徳、菅野等にして……」とあり、つねに尾行がつけられていたこと、さらに赤旗事件一カ年目にあたる六月二二日、千駄ヶ谷平民社で幸徳、菅野は小集会を開いたが、集まったのはわずかに四人、そのなかに原田新太郎もまじっていて、ほとんどの人がおそれ近づかなくなった平民社になお出入していた最後のメンバーだったことがわかる。それから数年とんで一九一五年(大正四年)、久板卯之助は『労働青年』を出し、さらに小石川の渡辺政太郎と共に、アナキズム研究会を開いて、労働者を集めたが、その熱心な常連であったこと、また、大正五年政友会を改組した信友会の創立にあたって一メンバーとして大きく力を尽したと伝えられている。

### 要視察人となる

新しい世界を見出した一九歳の青年山鹿にとっては、政府のきびしい監視も、冬の時代の閉塞状況も、なんらたじろぐものとはなりえなかった。彼はまず、大杉の忠告——当分はおとなしくかくれて本を読め——によって、平民社その他が出した社会主義文献類をしゃにむに掻き集めた。しかし昼間働き夜は寄宿の生活では、それを熟読するどころか、実際は本を置いておく場所もない。そこで、勤め先の築地活版ではまだステッキを使わしてくれない半人前扱いだったが、卒業したことにして、京都の点林堂へ帰ることにした。じっくり勉強しながら、活動の場をつくり出そうと考えたのである。

家に落ち付いた山鹿がまず第一番にやったことは、かねて考えていた外国のエスペラント雑誌に「各国のアナキストと文通したし」という広告を出すことであった。当時海外諸国の諸運動は、その出版物の直接購読というかたちで、ごく少数一部の個人に入手され、新知識として割合迅速に雑誌などに掲載紹介されていた。またアメリカの運動とは幸徳の渡米以後、個人間でわずかながら交流が生まれていた。しかしアメリカを経由しての一部のニュース以外に、海外、とくにヨーロッパでは、日本の運動はまったく知られていないに等しかった。

それゆえ山鹿のこの広告は、日本という極東の小国に、アナキズム運動が存在することを直接世界中に報知するものであり、またささやかなようでも日本のアナキズム運動が、インターナショナルなひろがりを持つ最初の銘記すべき声としての意味をもつものであった。このようにして山鹿は、彼の活動の第一歩から、彼が何よりもその力を発揮できる分野を見出した。そして以後終生、海外に対す

る日本の運動の窓口としての役割を、公的にも私的にも果たし続けることになったのである。

——広告に第一に応じてきたのは、ペトロヴというロシア人、セントピーターズブルグからであった。「君のハイデオVについて知らせ」とある。ところがそのイデオは辞書にただ観念と訳してあるだけで、中学一年中退の私には、カンネンという日本語が何のことか、まるでわからなかった。当時はまだ、思想という言葉が一般化していなかった。観念——心を観る、だから干眼の一種かなどと、あれこれ思い悩んだ……。

そして私は、こんな薄弱な、基礎知識も充分でないところから、アナキズムの本を読みはじめたのであった。それゆえ私は一字一句もろさず、意味がわかるまで熟読した。日刊『平民新聞』のとじこみも、隅から隅まで一心によんだ。「眼を皿にして」という形容が、われながらびりする毎日であった。

私は一日中本を読みふけると、夜半にそと家をしのみび出た。そして、恐いもの知らずの血気で、南禅寺の山門や同志社講堂などに盛んに落書きをやった。幸徳秋水が『自由思想』に書いた創刊の辞を暗記し、それを白墨でかきながつて歩いた。

これが原因で、落書宣伝の筆跡を写真にとった警察が、身辺をうろつき出した。一方、エス雑誌の広告は早速効果をあらわして、各国いるんなどころから、ワンスと手紙が来はじめた。福田国太郎と文通をかわすようになったきっかけはこのときである。

広告に応じて、海外から続々手紙がとびこんだ。その中に、国内からだひとつ、福田からの手紙があった。彼は鹿児島の特売局につとめていた。それが福田との文通のはじめであった。：

：あまり外国通信が頻繁にくるので、やがて警察が眼をつけ出した。その前後、福田から、「監視がうるさくて、専売局におれなくなったので、郷里鳥取へ帰る。危いから当分通信をしてくれるな」と書いてきた。そしてしばらくして鳥取から手紙がきたが、そのあと彼は突然逮捕され、所蔵の本などを調べられて一カ月あまり拘留されていたとのことであった。

いま残っている当時の内閣警保局発行資料には「明治四五年二月四日、匿名をもって鳥取在住福田国太郎宛、エスペラント語をもって主義的通信をなしたる者あり。発信者京都在住山鹿泰治なること判明せり」の記事がみられる。鳥取に帰ったこの福田は、翌年つてを求めて上京し、共同火災保険会社に務めたが、やがて二年の後東京へ帰った山鹿と出合い、共に活動を始めるのである。

### 電気工になって大連へ

さて、山鹿の身辺に警察がうるさく眼を光らせ出したことは、すぐ家人も気付くところになった。そしてあれこれ詮索のあげく、朝晩意見がましい小言である。部屋住みの身で、これでは何の為に京都へ帰ったのか、どうしようもない。とうとう深夜塀を越えて家をとび出した。荷物は行李ひとつである。ところが、上京して大杉の家を訪ねたとたん、跡を追ってきた姉が待ちかまえていて、いやおうもなく京都へつれ戻されてしまった。そのうえ四六時中、部屋に閉じ込められて見張りつきの監禁である。何日も外出できず、本も取り上げられて、ただぼんやり考えこむ以外に日々が続いた。

そのあげく山鹿は、いっそ日本でぐずぐずしているより、無銭旅行でヨーロッパへ行こうと思いつた。エスペラントの文通で各国に知己があったので、ゆけば何とかなるだろうという自信があっ

た。しかしそれにしても印刷だけでなく、もう一つぐらい技術を身につけておく必要がある。このころから、山鹿には思いきった決断と同時に、慎重な準備の性行があったのであろう。当時新時代の技術といえば、何といっても「電気」であった。そこである日、彼はまるで人が変わったように兄弟夫婦に恭順を申し出て、当時京都で最新の工場であった奥村電気商会へ技術工見習いとして勤め出した。毎日変圧器の試験をやりながら、一心に電気工学の勉強を始めたのであった。

どうか、奥村で一人前扱いされるようになったころ、知人で満鉄に赴任するという人がいた。頼みこむと、大連発電所に働く口があるという。そこで山鹿はヨーロッパ無銭旅行の第一歩として、一九一三年の早春、文通している満州のエスペランチストなどにも連絡の上、勇躍、大連へと旅立ったのである。

#### 満鉄大連発電所

——発電所の仕事は全く知らなかったが、奥村で得た知識で充分足りた。電工見習いという名で、若い連中と一緒に雇われたが、とにかく英語がわかるのでゴマカシがきき、たちまち重用される。満鉄が、ドイツシーメンス社から輸入するメーターは、私の試験を受け、能率カードを付けられる。全満州の需要メーターを一手にテストし、毎日百近くもやってのけた。一方基礎を得るために、夜学に一年近く通って、電気工学と中国語を学んだ。

山鹿はエスペラントを学ぶことで、ほとんど能力がなかった英語が何時かわかるようになり、使いこなせるようになっていた。それ以後、しばしば実用しているうち、読んだり話したり全く不自由を

感じなくなった。また、この時夜学で習った北京官話は、後に一九二五年、大道社から彼が刊行した『日・エス・支・英会話と辞書』となって結実したほど、完全に実力のついたものであった。また、電気工学についても、基礎的にはわずか二年余の学習と実習にもかかわらず、生来の科学好きと、エス語による海外の最新論文あさりで、その知識は先端をいくものとなった。例えば、まだ一般化されぬ当時に無線機やラジオを作って、周囲の人たちを驚ろかせたことなど、いくつかのエピソードを残している。

このようにして満州時代の山鹿は、勉学と労働、そしてエスペラントによる交遊・海外文通などに励みながら、大連港にはいった船の無電室を訪問したり、大枝太郎とグライダーを作って飛んだり、その一年間をまたたくまに過ごしたのである。